

第 154 回関西スペイン語教授法ワークショップ (TADESKA) 例会

日時：2022 年 7 月 9 日 (土) 15:00 - 17:00

場所：Zoom を利用したオンライン開催

担当：村上陽子

TEMA 1: Perspectivas de los “no profesores” acerca de nuestra pregunta: ¿Cuáles son los significados del aprendizaje de idiomas extranjeros en las universidades en la nueva era?

TEMA 2: Alicante sorprendente

CLIV Reunión del Taller de Didáctica de Español de Kansai (TADESKA)

Fecha y hora: Sábado, 9 de julio de 2022, de 15:00 a 17:00

Lugar: En línea (Zoom)

Moderadora: Yoko MURAKAMI

\*\*\*\*\*

**テーマ 1 「先生ではない人に聞いてみた大学で外国語を学ぶ意義」**

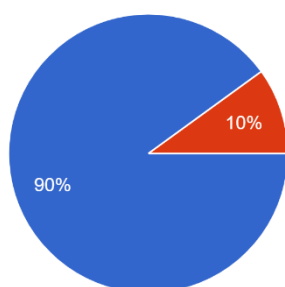
変化する社会の中で、先生ではない人たちは教育機関で外国語を学ぶ意義をどう考えているのか、ということに興味を持ち、教職以外の職業に就いている人に大学で外国語を学ぶ意義についてアンケート調査を行った。ワークショップでは、アンケート調査の結果について報告する前に参加者にも同じ内容のアンケートをその場で実施し、その結果についても共有した。

アンケートでは、回答者の年代、職業に関する質問とともに、以下の質問をした。

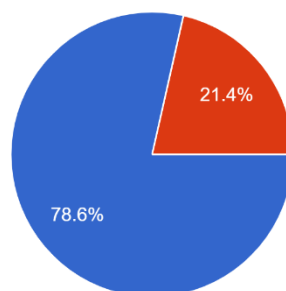
1. グローバル社会と言われて久しく、AI などの高度なテクノロジーが生活や学習・教育活動に直結するようになってきました。例えば、機械翻訳の普及により、外国語を知らずして外国語を使える状況、またインターネットやスマホアプリでいつでも好きなだけ外国語に触れ、外国語学習も可能な状況に、学生たちはいます。このような中で、今、そして今後、大学で外国語を専攻としてではなく、必修科目として学ぶ意義はあると思いますか？
2. 1 の回答の理由を教えてください。

ワークショップ参加者 14 人と調査協力者 10 人の質問 1 への回答結果は以下のようになった。

【教員以外】



【ワークショップ参加者】



● ある  
● ない

教職以外の職業に就いている人の9人が必修として外国語を学ぶ意義があると回答し、1人が意義なしと回答した。一方で、全員がスペイン語教員であるワークショップ参加者に関しては、11人が意義ありと回答し、4人が意義なしと回答した。

教員以外の職業についている人のうち意義があると回答した人が示した理由を分析すると、大学がどのような場所であり、何を学ぶことができるかという2点に関連する考えに集約されていた。

- 大学とは
- ・ 専門的、または教養としての学びを深める場
  - ・ 学生がより広い社会を知って自分自身の視野や可能性を広げる機会を与える場
  - ・ 母語以外をしっかりと学ぶ場
  - ・ 自己学習のきっかけを与える場
- 大学では
- ・ 対面(対人)やリアルなコミュニケーションから学ぶことができる。
  - ・ 生身の人間との会話から学ぶことができる。
  - ・ 言語や背景にある文化を研究している教員から言語を学ぶことができる。

また、外国語を学ぶことによって、自らから伝え、お互いを理解しようとする感覚の欠如に歯止めをかけることが可能になり、「少数派」を知ることにつながるという理由もあった。

意義がない、と回答した1人はその理由として「今までのように全ての人が学ぶ必要はなくなったと思います。専攻に合わせて必要な人が必要な語学を学ぶべきではないでしょうか」と記していた。

ワークショップ参加者が示した理由は以下のとおりである。

#### 【意義あり】

- ・ 会話はやはり、人と人をつなぐものだから人に教わることは必要だと思う。
- ・ 必修にしないと4年間語学を学ばずに社会に出てしまう学生が出てしまう。社会に出ても外国語は必要ではないか。
- ・ Un idioma extranjero nos sirve para acceder a un mundo más amplio. Además ayuda al

cerebro a ser más activo y flexible.

- ・母語とは異なるものの見方、母語では表現できない概念などに、「身をもって」触れることができ、それによって思考が豊かになると思うから。

- ・外国語は単にスキルとして学ぶだけでなく、異文化理解にとって必要な技能だと思う（そういうことが習得できる教育内容であることが前提）。

- ・英語以外に外国語を学ぶと、英語や母語を立体的（色々な側面から）に観察できるのでは？

- ・生涯を通じて触れる「外国語」が「英語」だけというのは大変に偏ったものの見方を生むと思う。英語以外の外国語を「マスター」する必要はないと思うが、その言語が使われている地域の文化などを表面的に学ぶのとは違う学びがあると思う。また、自らの関心の赴くままにしか情報を得ようとしないことにも問題があると思っている。初めに言語を選択する際には自分の関心に基づいていようがいが、一度決めたことをきちんと完遂するという経験をする機会にもなると思う。

- ・ El aprendizaje de una lengua extranjera supone para los aprendientes (independientemente de su especialidad) la oportunidad de estar en contacto no solo con una cultura diferente, sino también una perspectiva diferente del mundo. El enriquecimiento que ello supone para los estudiantes es suficiente como para estudiar una lengua extranjera como asignatura obligatoria.

- ・ある、というより「あると思いたい」でしかありません。そういう限定ですが、自分の思考方法（言語的思考）が当たり前のものではなく、ある特定の文化社会の枠組みに入ったものであることを自覚できること。当該の言語文化（のエッセンス）にダイレクトに触れる機会を得ること。ネイティブの人とちょっとでも話せたら、その感動は大きいし、互いを人として認識できること。抽象的すみません。

#### 【意義なし】

- ・外国語を学ぶ意義はあると思うが、主専攻でない学生が必修科目として学ぶ必要はないと思う。それでも、選択科目として残しておくことには賛成。「教養」としての価値があるから。

- ・本当は語学の学習を通じて「言語」の向こうにある「世界」に気づいてもらいたいので「ある」にしたいけど、学生が「強要されている」と感じているのを感じるので、必修から外してもいいような気がします。

- ・現状を考慮した場合外国語を学ぶ意義はあると考えているが、大学で必修科目として学ぶ意義まであるかは疑問。大幅な教育改革が可能であれば、中学や高校などで英語以外の外国語を学ぶようにして、大学では自由選択程度で良いのではないかと考えている。

これらの結果を紹介したあと、文部科学省が各大学に設定を義務付けているディプロマポリシーやカリキュラムポリシーについて、外国語教育・学習がそれらのポリシー記述でど

のように位置づけられているのか、いくつかの大学の事例を扱った。

その後、参加者からは、外国語を学ぶには意義があるが、必修として学ぶことについての疑問の声や、必要に迫られずに、あるいは必要とは別の観点から外国語を学ぶラストチャンスが大学での外国語教育にあるので全員が英語以外の外国語を学ぶのがよいのではないか、という発言がなされた。

筆者がこのテーマをワークショップのテーマとして選んだ理由は、職業柄、外国語教育の意義や必要性について外国語教員の間で議論する機会はあるが、大学での学びを終えた学生たちが社会活動を行う一般的な世界で働いている人々の考えを知る機会が少なく、一般社会におけるトピック1つとして位置づけた上で考察したり検討したりする必要があると考えたからである。アンケート調査の結果を見て、外国語学習の意義についてより深く考察できているのは、当然ながら外国語教育に携わる教員たちであることが分かったが、教職以外の仕事に従事している人の意見から、外国語学習が実施される枠組みである大学（における教育）のあり方に関する示唆を得ることができた。

## テーマ2「びっくりアリカンテ」

2021年9月から2022年3月初旬までスペイン・アリカンテに滞在する機会を得、アリカンテで見聞きした「びっくり」な体験について話した。なお、発表内容と資料は2022年2月に東北大学のスペイン語履修生たちに向けて行った20分程度の「お話し会」で使用したものである。のちに参加学生が自らの発表の中で私の発表に言及していたことを担当教員が知らせてくれ、授業内で「小ネタ」的に話すのであれば、この程度の分量と内容で十分であり、つい自分の専門分野や知っていることを丁寧にたくさん伝えようと頑張ってしまうが、興味を持った学生が自分で調べ、考える余白を残しておくことが大切である、ということも伝えたかった。

発表は、「入国制限解除後のアリカンテ」「スペインの多様性を再認識」「内戦の最後の砦」という3つのテーマで行った。「入国制限解除後のアリカンテ」では、2021年5月に入国制限を段階的に解除し、6月7日からワクチン接種済み観光客の受け入れを開始していたスペインのリゾート地であるアリカンテの大賑わいの様子や、外国人観光客と比較するとマスク着用やスーパーなどでの手袋使用など感染予防にまじめに取り組むスペインの人々のwith コロナの暮らしについて報告した。2つ目のテーマ「スペインの多様性を再認識」では、地中海沿岸地域にあるアリカンテの気候、地勢などが暮らしにもたらしている影響やスペインの公用語とはされていないバレンシア語が公的案内板などで義務的に使用されている状況、さらには移民国家スペインらしく、様々な民族が共存している現状について話した。最後に、「内戦の最後の砦」では、スペイン内戦において共和派の最後の砦だったアリカンテに残る内戦の傷跡について触れ、防空壕ツアーなど戦争の悲惨な記憶を風化させないための取り組みが行われていることについて発表した。

（文責 村上 陽子）